



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第55号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2014-08-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73609
Type	journal
File Information	DRFmonthly_55.pdf



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第55号

【特集】今から準備！Open Access Weekのススメ

【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常

No.55 August, 2014

<トピック> DRF企画ワーキンググループ新メンバーよりひとこと

【特集】

今から準備！OPEN



International

ACCESS WEEK のススメ

2014年のオープンアクセスウィーク(Open Access Week: OAW)は10月20日(月)～26日(日)に行われます。そこで、OAWについて再確認するとともに、今年の準備のために昨年の取り組みを振り返ってみましょう。

今更聞けちゃう！OAWとは？

論文などを利用制限なく、無料・オンラインで公開するというオープンアクセス(OA)の持つ可能性について、それぞれの立場から認識を共有したり、OAへの理解を広めていくための機会がOAWです。

OAWは今から7年前の2007年にアメリカで行われた学生主導の“National Day of Action for Open Access”がもとになっています。ここでは2006年に提出された公的助成研究成果のOA化を求める、FRPAA法案のサポートなどが呼びかけられました。翌年には学術情報流通の活性化のための活動をしていたSPARCなどが世界規模のオープンアクセスデーを実施。そして、OAへの関心の高まりにより、2009年からは期間を1週間としてOAWが開催されています。2013年の期間中には世界中で200以上のワークショップやセミナーなどのイベントが行われた^[1]ことから、学術情報の流通にとって大きな意味を持つ期間であることがわかります。また、それらのイベントの他にも、ポスターやwebサイトでの広報などの取り組みが様々な機関で行われています。

[1]<http://www.openaccessweek.org/events/event/listArchive>

より集計



OAWを主催しているSPARCのNickさんより2014年のOAWテーマについてご寄稿いただきました。

国際 OAW2014 テーマ：“オープンの世代 (Generation Open)”

今年の国際OAWのテーマ、“オープンの世代”は未来に焦点を当てています。この未来とは、学術出版のみでなく、個々人の未来でもあります。なぜなら、OA運動の最終的な成功はこの個々人にかかっているからです。

いくつかの点では、未来に焦点を当てるのは“Setting the Default to Open”や“Redefining Impact”などの過

去のOAWのテーマと似ています。しかし、今年のテーマは、OA支持者たちに対して、最終的に今のシステムを受け継ぐことになる人々を巻き込み、支援するために、学術コミュニティのオープンなシステムをただ想像するだけであることから一歩踏み出すことを求めている点が特徴的です。

短期的には、以前から学生や若手研究者の勢力が国やより身近なレベルでのOAを推進する効果的な支持者となっています。カリフォルニア大学からナイロビ大学まで、さまざまな機関のOAポリシー制定に学生が一役買ってきましたし、昨年ホワイトハウスが出した、アメリカの公的助成研究成果のパブリックアクセスに関する指令の実現にも、学生が重要な役割を担いました。

一方長期的には、現在の学生や若手研究者が、将来教授や理事、出版者、政策立案者になります。若い研究者と彼らのキャリアの早い段階から連携をし、研究成果をOAにする方法とその恩恵に対して理解を得ておくことは、文化の変革という長期的なプロジェクトにとって非常に重要な投資です。

国際OAWはたったの1週間しかありませんが、“オープンの世代”というテーマが、次世代を引き込み、OAへの転換の中心とするような協力関係を築くための対話をはじめめるきっかけとなることを期待しています。

<訳：松本 侑子(広島大)、西蘭 由依(鹿児島大)>

<原文>

“Generation Open” To Be Theme for International Open Access Week 2014

Nick Shockey

Director of Programs & Engagement, SPARC

Director, Right to Research Coalition

“Generation Open,” the theme for this year’s 2014 International Open Access Week, focuses on the future—not just of scholarly publishing but also on the individuals upon whom the ultimate success of the Open Access movement will rely.

In some respects, this focus on the future is similar to previous Open Access Week themes, such as “Setting the

Default to Open” and “Redefining Impact.” However, this year’s is unique in asking advocates to go beyond imagining an open system of scholarly community to engage and support those who will ultimately inherit this system.

In the short term, we’ve already seen the power of students and early career researchers to be effective allies in promoting Open Access at the local and national levels. Students have helped establish institutional open access policies from the University of California to the University of Nairobi, and students played a significant role in securing last year’s White House Directive on Public Access to Federally Funded Research in the United States.

In the long term, today’s students and early career researchers will become tomorrow’s faculty, administrators, publishers, and

policymakers. Partnering with young researchers at the beginning of their careers and ensuring they understand both the methods and benefits of making the results of their research openly accessible is an essential investment in the long-term project of culture change.

While International Open Access Week is only just that—one week—we hope that the theme of Generation Open will start conversations around the world that engage the next generation and create partnerships that put them at the center of the transition to Open Access.

Nick Shockley「*“Generation Open” To Be Theme for International Open Access Week 2014*」はCC-BYライセンスによって許諾されています。 <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>

去年、どんなことやりました？ OAW 2013 レビュー

旭川医科大学

本学では学生を対象にサイエンスカフェを開催しました。広報は、オレンジのポスターを貼りまくり、さらに素材に公開されている△スタンドをベースにした通称ビールジョッキ(笑)を学食の全テーブルに設置しました。当日は、先生方にオレンジ色にデコレートしたベンチでご自分の研究について語って頂き、最後にリポジトリを宣伝しました。他にHPにロゴを表示する、有志でオレンジの服を着てくる等、費用をかけない工夫で参加しました。



展示、学術成果のオープンアクセスとHUSCAP



サイエンスカフェ

北海道大学

本学の研究者5人に、研究内容をインタビューしてポスター10枚に仕上げました。学生や一般市民の方にも、研究内容や本学リポジトリ「HUSCAP」の活動を知ってもらえることができたと思います。準備については、インタビューやポスターづくりに相当な時間がかかりましたが、展示さえしてしまえば、手間がかからず、また多くの人に広報を行える点も◎でした。

静岡大学

静岡大学では、DRF提供のOAW素材集と大学キャンパスキャラクター「しずっぴー」を使ってOAW2013をPRしました。機関リポジトリは図書館だけでなく大学全体として位置づけられている事業ですので、大学を代表する“顔”に登場してもらいました。構築から数年が経ってリポジトリの運用も安定してくると同時に、初期に力を入れた広報活動が、つつい後回しになってしまいます。OAWはそんな広報活動の大切さを思い起こしてくれるイベントでもあると思います。



名称は「フクロン」に決定



OAWポスターを持つしずっぴー

岡山大学

昨年のOAWに岡山大学附属図書館ではOAを広報する特設WEBサイトを作成しました。昨年度は学位規則が改正され、博士論文のインターネット公表が定められたこともあり、これを機に皆さんにOAがどういうものかということを知ってもらい、理解を深めてもらいたいという考えから、取り組みを実施しました。また、少しでも興味を持ってもらえればと思い、親しみあるキャラクターを作成し、名称を公募する企画も行いました。

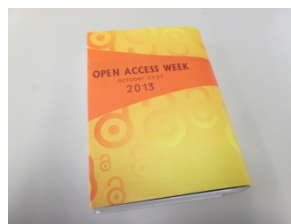
お役立ち！DRF OAW素材集

DRFでは毎年、日本国内でOAWを盛り上げるための素材を募集・配布しています。ダウンロードはDRFサイトOAW Week (<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?oaw2013>)より。

※サイトへのリンクは昨年度のものです。2014年版はもう少しお待ちください。



各種ポスター



文庫本サイズ
ブックカバー



Webページのロゴ
オーバーレイ表示
プログラム



三角スタンド。それ
ぞれの機能にあわせ
て文章の修正可能



「オープンアクセス」紙
芝居。サイネージ等
で上映可能

また、OAWの本家サイトでも素材の配布が行われています。

<http://www.openaccessweek.org/page/downloads-2>

2014年も素材募集中！

ルールはたった2つ：

- ・ベースはオレンジ(OAWカラー)
- ・OAW等の文字またはロゴを入れる

募集期間：平成26年8月1日～10月19日

送付先：oaw@lib.hokudai.ac.jp

ポスター、パンフレット、動画やWeb用素材など何でもOK。あなたの作品をお待ちしております！



※PowerPoint等、ファイル内容の変更が可能な一般的なソフトウェア(サイズ自由)で製作して下さい。動画等のマルチメディア作品の場合は特に形式は問いません。

※お送りくださった作品は、DRFサイトに掲載し、だれでもダウンロード・変更・再利用できるものとします。

DRF企画ワーキンググループ 新メンバーよりひとこと

月刊DRF 53号で今年度の企画ワーキンググループの体制を紹介しましたが、そのうちの 新メンバー・再加入メンバーの一言挨拶です。どうぞお見知りおきを！

リポジトリに関するコミュニティがあると聞き、おもしろそう！と、ふらっと参加。少しでも貢献できるように、みなさまと共に活動していきます。

川村 拓郎 (広島大学)

リポジトリの業務経験が浅く、まだびよびよしていますが、活動を通じて経験や知識の共有に貢献すべく頑張りたいと思います。宜しくお願いします。

佐藤 恵 (東北学院大学)

知識も経験も浅い駆け出し者ですが、他メンバーに置いて行かれぬよう、皆様のお役に立てますよう、力いっぱい駆け回る所存です。

中谷 昇 (鳥取大学)

よろしくお願いします。最近、正解がないようなときこそ、コミュニティが大事なあと実感しています。試行錯誤しながら進みましょう。

林 和宏 (名古屋工業大学)

外から見ていたDRFの、少し内側に足を踏み込んだような心地です。他の企画WGメンバーの熱さにやや圧倒されつつがんばります。

小村 愛美 (神戸大学)

三年ほど図書館を離れて研究支援に行っていたので ウラシマ状態です。まだまだ追いつけないのですがよろしくお願いします。

三角 太郎 (千葉大学)

2年のブランクを経て戻ってまいりました。その間も月刊DRFで動きを知ることができました。今後も皆さんに情報を伝えていきたいと思っています。

守本 瞬 (金沢大学)



2014年6月28日に開催された情報メディア学会第13回研究大会で、「心理学分野におけるオープンアクセスの進展：『筑波大学心理学研究』掲載論文の引用調査から」と題した発表^[1]を行ない、ポスター賞をいただきました。口頭発表は自分が担当しましたが、筆頭著者としてずっと研究を率いてきたのは筑波大学・逸村研究室の大原司さんです。オープンアクセス(OA)・機関リポジトリとも関連の深い内容であり、大原さんの許諾も得られたので、本連載でも発表の概要を紹介します。言い換えれば、前回に続いでるの宣伝記事です。

今回の研究では筑波大学が出している紀要、『筑波大学心理学研究』に掲載された論文から、引用されている論文のOA状況を調べています。研究者が引用している文献のOA状況を調べることで、「研究者が実際に使うもの」がどの程度OAになっているのか知ることが目的です。対象を心理学分野に絞ったのは、先行研究^[2]から機関リポジトリ等で公開されている、OA文献の利用経験のある研究者が多いことがわかっていたためです。使ったことがある研究者が多いことはわかったけど、では実際にOAになっている文献はどの程度あるのか調べてみよう、というわけ^[3]です。

調査対象は『筑波大学心理学研究』に2006～2013年に掲載された論文から引用されている論文のうち、日本語で書かれたものです。調査方法は月刊DRF第41号(2013年6月)でも紹介した倉田敬子先生たちの研究^[4]を踏襲し、Googleを用いて対象論文の入手可否、OAか否か、公開手段などを調べています。

大原さんの研究手法で面白いのは、その調査結果の出し方です。調査結果に基づき、論文のOA状況を出版年ごとに算出しているのですが、「引用された論文」の出版年ごとではなく、「引用した側の論文」の出版年ごとに結果を集計しています。さらに、単純に調査時点(2013年12月)にOAであったかどうかだけではなく、引用当時(引用した論文の出版当時)にOAだったかどうかについても、公開日付等から算出しているのです。

その結果をまとめたものが図1(当日の発表スライドから転載)です。図で水色の部分が引用した論文出版の時点で既にOAであった論文の割合、薄赤色の部分が引用した論文の出版後、遡及的にOAになっていた論文の割合を示しています。見てのとおり、水色の部分、すなわち引用した論文出版当時からOAで手に入るものの割合は堅調に増えてきており、心理学分野の研究者がOAで見られるものの割合は年々高まっていると言えます。逆に薄赤色の部分、遡及的にOAとなった論文の割合は遡るほど高まる傾向があり、これは昔はOAではなかったものも、遡及的にOA化が進んでいることを意味しています。二重の意味で、日本の心理学分野におけるOAは進展してきていると言えるでしょう。

ちなみにこのOAの実現手段は82.1%がJ-STAGE等の

雑誌自体が無料公開されているケースで、36.0%が機関リポジトリで(一部重複あり)、他の手段を用いている例はほとんどありませんでした。ただ、例によって機関リポジトリで公開されているものの大半は紀要論文で、セルフアーカイブの例はわずかにとどまっています。また、図1でOAになっていない部分の大半は緑色の「全文なし」で、そもそも電子化されていない・インターネット上では手に入らない論文です。生物医学分野を対象とする倉田先生らの研究では、OAになっていないもののほとんどは有料の電子ジャーナルで公開されている論文でしたが^[4]、日本の心理学分野の場合は電子化されていればほとんど無料で見ることができる、そうでなければそもそもオンラインで閲覧することはできない、というかなり異なった状況に置かれていることがわかります。このあたり、なんとかしないといけないうね…というのは今後、機関リポジトリ推進委員会等で取り扱われるトピックに…なったらいいなあ…。

より詳細な数字等については^[1]に挙げたリンク先を参照いただければ幸いです。筆頭著者の大原さんは引き続きこの分野で研究を続けていきたいとのことですので、ぜひご注目下さい！

引用論文のOAの割合(引用時)

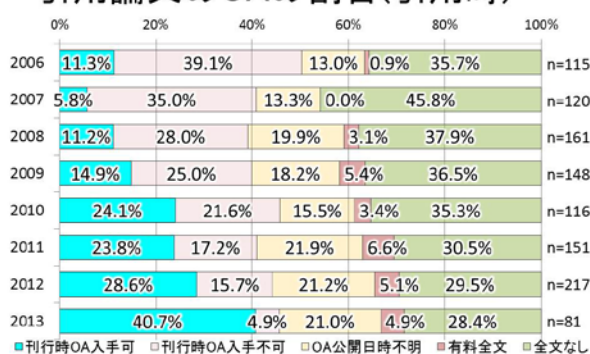


図1

[1] <http://hdl.handle.net/2241/00121824>

[2] <http://lis.mslib.jp/article/LIS068023>

[3] なおここで言うOAとは「その文献がインターネット上で、無料で手に入る」というくらいの緩い意味です。

[4] <http://dx.doi.org/10.1371/journal.pone.0060925>

佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科助教。
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」
(<http://d.hatena.ne.jp/m-in2-fly/>)管理人。



次号予告

【特集1】解説！機関リポジトリ推進委員会の目指すものとは？

【特集2】第1回SPARC Japan セミナー2014参加報告

【連載】今そこにあるオープンアクセス

月刊DRFでは、皆さまからのお便りをお待ちしています。
gekkandrf@gmail.com

読者アンケートにご協力ください。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>